

テーマ「路上生活者」

～若者・女性が増える？統計に乗らない実態～

パート	内容
オープニング	<p>日中の最高気温 5 度。昨年冬、一番の寒さという 2 月中旬の土曜日。</p> <p>池袋の公園で行われている炊き出しに、初めてボランティアとして参加しました。調理ボランティアが作った豚汁が配られる 2 時間前から、衣類やコーヒーの配布などが始まり、関係者は準備を始めます。そんな中、微笑んでくれた 30 代の男性がいました。</p>
ストーリー 1	<p>高田正人です。35 歳です。TENOHASI さんにはとてもお世話になったので、今は、少しでも恩返しをしたいと思ってボランティアに参加しています。実は、つい先日までホームレスでした。</p> <p>長野県出身で大学進学と共に上京しました。大学卒業後は住宅メーカーに勤務をし、営業をしていました。営業成績もほどほどでしたが、直属の上司とはうまが合わず、今思えばパワーハラスメントを受けていましたが、あまり気にしないようにして仕事に専念していました。その会社に勤めて 10 年が経ったころ、母が末期がんだと知らされました。父親はずいぶん前に亡くなっているのに、1 か月休職し、母の看病をすることに決めました。医師に余命を宣告されていた通り母は亡くなってしまいました。1 か月後職場に復帰したところ、私の席はありませんでした。</p> <p>労働組合は会社にはありませんでしたし、労基署に相談したところ一度こじれるとうまくいくケースはほとんどないと言われ、やむなく退職しました。そこからです。</p> <p>最初は派遣で仕事をしていましたが、派遣契約をきられ、日雇いで仕事を探しても毎日仕事があるわけではありません。少しあった貯蓄もだんだんと底をつき、アパートも引き払うことになりました。自分の荷物は大学時代の先輩の家に預かってもらい、3、4 か所ぐらいのネットカフェをローテーションしながら寝泊まりを始めました。面接までこぎつけても住所がないと就職できず、就職できないとアパートを借りることもできないというジレンマのなかにいました。長野に親戚はいますが、長年まったく付き合いはなく、そこに頼るといことは思い付きもしませんでした。頼るくらいならばネットカフェでの暮らしの方がよほどマシでした。</p> <p>もう死ぬしかないと思い始めたころ、たまたま通りかかった池袋の公園でもらった tenohasi さんのチラシを見て、生活相談ができ、シェルターがあることを知りお世話になることにしました。生活保護の申請をし、大学時代の先輩が所有するアパートを借りることもでき、いまは就職活動をしています。</p> <p>就職活動の合間にシェルターに来て話をしたり、ボランティアの手伝いをしていると気持ち</p>

	<p>もとても前向きになります。何度も死んでしまいたいと思っていたことがあるだけに、あのとき池袋の公園でたまたま tenohasi さんの炊き出しに出会ってなかったら、今頃どうなっていたかと考えると恐ろしいです。</p>
<p>社会の現状の説明</p>	<p>職場でのいじめや病気による退職、親、家族との不仲、親の死がきっかけになって考えたこともなかった生活に転落することがあります。また、家族や友人間の絆が弱くなっていることや、迷惑をかけたくないという気持ちがこのような問題の原因にあるように思います。NPO 法人 TENOHASI では、炊き出しや夜回りといった支援だけではなく、路上脱出から安定した生活を築くまでのトータルな支援を行っています。</p> <p>なぜなら、まず、生活保護を受給することは支援団体や法律家の助けを借りずに受給することは難しいのが現状ですし、一度生活保護を受けても、また路上に戻ってしまう人がたくさんいるからです。そこには、tenohasi が路上生活をしている人に対して知能テストや面接調査をした結果、軽度の知的障害がある人が 28%、中度の障害がある人が 6%だという結果にも理由があります。</p> <p>まず、生活保護などの公的支援を受けることができるようなサポートが必要です。そして、生活保護により最低限の生活資金を受給すれば、あとは自己管理をして生活ができ、就職ができるのかというと、現実はその簡単にはいきません。一人一人への自立に向けたきめ細かい支援を行う必要があるのです。ごはんの炊き方、ゴミの出し方、字も読めない人もいますから役所の手続きも同行が必要です。障害があつて就労が難しい人には日中の居場所を作る必要があります。他にも、金銭管理や就労支援など一人一人に密着しながら様々なサポートをし、安心して生活できるようにお手伝いをしています。このようなサポートがないと、また生活が破綻して路上に舞い戻ることになってしまうからです。</p>
<p>課題に取り組み NPO の紹介</p>	<p>NPO 法人 TENOHASI の清野です。私たちは池袋で路上生活支援を始めて 10 年目になります。ほぼ全員がボランティアスタッフで、皆さんからの支援によって活動を続けています。</p> <p>当たり前ですが、生まれついてからの路上生活者はいないということです。ほとんどの方は家族、職場、家、温かい人間関係、それらを失い、また奪われ、または最初から与えられず、そして傷つき、疲れ、ボロボロになった状態で路上に出ます。私たちはそういった方々と炊き出しや夜回りで出会い、話し、信頼関係を築こうとしています。そして出会った方に、生活保護のような公的支援を使って路上を脱しませんか、とお誘いします。しかし、すぐに、「じゃあ、それで」とおっしゃる方は多くはないです。理由はいくつかあります。まず、生活保護などの公的支援があることを知らない方もたくさんいらっしゃいます。社会的経験が少ない、知識がない、そして精神障害、知的障害のために理解できない。「自分のことを本当に国が助けてくれるのかい?」と、おっしゃる方もいらっしゃいます。また、路上生活者などの貧困の方を狙った様々なビジネスがありますから、そのような貧困ビジネスで傷ついた方は支援ビジネ</p>

	<p>スでさえ、信用してくれません。</p> <p>次に、生活保護をとって最初に入るのが、行政の指定する寮です。寮とは言っても、貧困ビジネスが経営する、収容所といっても言いすぎではない環境です。発達障害や人間関係の苦手な方がその環境には耐えられず、多くの方はそこから逃げ出してしまいます。そこで傷ついた方は、「もう、あんなところは嫌だ」と、おっしゃいます。</p> <p>そして、その貧困ビジネスの寮で、何か月か頑張っただけで首尾よくアパートに入ったとしても、その先にあるのは孤独です。誰からも必要とされません。仕事もまず見つかりません。そして、話し合える友もなく、また、町にでれば「あの人は生保なのよね」と社会の厄介者扱いを受ける、そういった環境です。そこでの生活に耐えられず、もう一度路上の生活に戻る方が後を絶ちません。路上なら、まだ自分の力で生きている、自分で生活しているという実感があつた。国からお金をもらって、ただ食事をしているという生活には自分は耐えることができないとおっしゃる方がたくさんいらっしゃいました。</p> <p>私たちはそのような方々と話し、どういった環境ならば自分らしい生活が営めるか。それを聞き取り行政に提案し、生活保護などの公的支援につながった後なども、引き続き、話し合い、居場所を作り、仲間を作り、人間関係を作り、失った家族などの温かい人間関係を取り戻すお手伝いをしています。</p> <p>もう少し皆さんに知っていただきたいのは、かつてはほとんどが50代、60代であった路上生活者が、今は、若者、女性までもどんどん広がって増えているということです。つい最近も、知的障害のある30代の女性で街を彷徨っていた方を、何年かがかりで保護しました。その方は障害もあって、過敏もあるので集団生活は耐えることができません。私たちが提携している大家さんの持つアパートに入らせていただきました。不潔恐怖もあるので、他人が使った中古の洗濯機が使えないので、新しい洗濯機を買ってつい先日設置しました。日中やることはありません。日中行ける場所を一緒に探し、一緒に生活用品を買い替え、これからは障害者手帳があるから、障害者福祉のなかで作業所がないかを探しています。それでもまた路上に出る方がいらっしゃる。このようになかなか一筋縄ではいかない世界ですが、今の社会の中でそのような人たちが他人事ではない。そのような社会がイヤだというメンバーと一緒に活動を続けています。</p>
<p>プロジェクトに参加したプロボノワーカーの声</p>	<p>TENOHASI のプロジェクトに参加したプロボノワーカーです。私がプロジェクトを通して強く感じたのが、TENOHASI さんの打ち合わせでも何度か出てきたお話ですが、「ホームレス」という種類の人がいるのではなく、ある人が「ホームレス状態にある」のだということを理解すべきだということです。</p> <p>「ホームレス状態になる」までには、仕事がない、お金がない、身体的な制約で仕事が見つからないなどの条件もありますが、それ以上に根深いのは、「ホーム」がない、困ったときに</p>

	<p>頼る「家庭」「実家」のような安心できる場所や相手がないということです。例えば、幼いころに虐待やいじめの経験をうけたりなど、不運にも「ホーム」をもつことが難しい環境にあった方たちがいます。こうした方はこれまでの経験から人とコミュニケーションをとるのが苦手であることも少なくないようです行政のあっせんなどで入居する物件よりも路上のほうが仲間もいるし、よっぽど安心できる、という話を聞き、当初は衝撃をうけました。ハコとしての住居よりも、路上のほうがよっぽどホームに近い場所だということです。</p> <p>TENOHASI さんが支援している人たちには、人とコミュニケーションをとるのが苦手な人もけっこういるそうですが、TENOHASI さんは限られた人数で、炊き出しや夜回りなどの活動を通して少しずつ人の心を開いていきます。一緒にご飯を食べたりして、信頼関係をつくり、その後個人にあった決め細やかな支援を日夜続けていらっしゃいます。すぐに結果が出たり、必ず結果がでる類ではない問題に対し、献身的に支援をしている TENOHASI のスタッフの方を目の当たりにし頭が下がる気持ちでいっぱいでした。</p> <p>また同時に、そうした地道な関わりの中で、TENOHASI 自体が彼らのホームになっていくのだ、ということをはっきりと実感しました。だから、「お世話になった恩返しをしたい」といって、支援を受けた人が今度はボランティアとして帰ってくるのだと思います。</p> <p>何かのきっかけで働けなくなったり、お金がなくなったとき、頼る「ホーム」を不運にも持ち合わせなかったことで路上生活に陥る人がいること、そしてそうした方を日夜根気強く支援し、「ホーム」と感じられる場所を作っている TENOHASI さんのような団体があることを多くの方に知っていただきたいと思います。</p>
<p>最後のまとめ</p>	<p>ホームレス問題について、自分には関係ない、仕事をしようと思えばできるんじゃないの?とっていたり、また、年代も 50 代から 60 代ぐらいをイメージされていた方も多いかもしれません。しかし、20 代、30 代のホームレスの 8 割は正社員として雇用された経験があるというデータもあります。ちょっとしたボタンの掛け違いでホームレス状態になる可能性があるのです。そして仕事のこと、住宅のことをはじめ、一人ひとりの自立までには、長期的なサポートを行わないと解決しない問題だということです。</p> <p>また、厚生労働省によるホームレスの定義では「都市公園、河川、道路、駅舎、その他施設を故なく居住の場とし、日常生活を営んでいる者をいう」とあります。ネットカフェやファーストフード、マンガ喫茶、サウナ、個室ビデオ店、健康ランドなどの屋内施設はこれに含まれません。</p> <p>路上以外にも目に見えない「ホームレス」あるいは「ホームレス予備軍」は存在し、ホームレスの形態は多様化してきている現状があります。ただ、高田さんのように元気に人とのつながりを持ち、再スタートを切っている人もいます。して、人の役にたきたい、名刺をもって仕事をしたい、資格をもちたいといががんばっている人もいます。手をさしのべあって支えていけ</p>

	る社会になるよう活動している団体があります。
--	------------------------

※冒頭部に出てくるストーリーは、事実に基づいたフィクションです。イベント当日に読み上げていただいた方とは、全く関係はありません。